都道府県番号	１９
都道府県名	山　梨　県

【　①□　　②□　　③☑　】
＊重点をおいた観点にチェックすること

Ⅰ　学校名及び規模

学校名	甲府市立上条中学校					
学　年	１　年	２　年	３　年	特殊学級	計	教員数
学級数	４	４	４	１	１３	２４
生徒数	１４４	１２７	１４９	２	４２２	

Ⅱ　研究の概要

（１）　研究主題

「主体的に考え判断し，行動する生徒の育成」

～学習の状況や成果を振り返らせる自己評価の実施を通して～

（２）　研究主題設定の趣旨

本校では，平成１４年度の１学期から絶対評価の導入にあわせて，生徒と保護者向けに当該学期に学習する内容と評価の規準について説明するための学習ガイダンス資料を作成し，さらに，生徒対象のガイダンスを実施するとともに生徒及び各家庭に配布することで学習への目標と見通しをもたせ，学習意欲の向上を目指す実践を行ってきた。

また，数学・保健体育・英語などのＴＴ授業の実施を通して，学習に対して受け身になりがちな生徒にきめ細かな指導や援助を行い，学びに対する積極的な意識をもたせ，意欲的に学ぶ態度を育てる取組を行ってきた。

現在もこのような実践を行っているところであるが，昨今様々なところで報告されるような「子どもの学び離れ」という現象に十分対応できているとはいえないと感じる。必要最低限のことは行うし，日常の授業に支障を来すことはないが，より高い目標を持って家庭学習に取り組んだり，自分自身の興味や関心に応じて課題を見つけて探求するなどの姿勢に欠けるだけでなく，それ以前の問題として，学ぶことの意味や必要性さえも見いだしていない者も見受けられる。このような現実をふまえ，上の実践と併せて「子どもの学び離れ」に対応する取組について研究したいと考え，自分自身の学習での成果を振り返らせることで学ぶことの意味を感得させる自己評価を実施することにした。学ぶことの意味を実感として感じ取ることができれば，学習に主体的に取り組む意欲の育成にもつながるであろう。また，学習意欲の向上は，他の諸活動に主体的に取り組む基盤にもなると考え，この主題を設定した。

Ⅲ　研究の概要

（１）　研究推進体制の工夫

本研究のねらいをより効果的に達成させるために，一部の教科での実践ではなく，全教科担任が全学年で同一の様式の自己評価を実施し，生徒に学ぶことの意味を感得させる実践を行っていることである。本校の教育システムとして位置づけ，本事業終了後も実践を継続させていく。

（２）　研究の実際

従来行われてきた自己評価の多くは，単なる振り返りにすぎないため，視点や規準が定まらず自己評価が情意面に偏りがちであった。そのため，認知面での変容がとらえにくく，自己の進歩・変容を実感しづらい。認知面での自己変容を実感することが，成就感や学習の効力感の感得につながり，学びの意味をとらえることができると考え，その部分を堀哲夫教授の提案する次の視点[1)]に基づいて改善した様式を採用し，本校の実践を行った。

①　１枚の用紙で自己評価を行う。
②　具体的な変容を可視的に確認する。
③　学習の情意面のみならず認知面も自己評価する。
④　自分の変容に気づくことにより学習の意味を感得する。
⑤　自己評価を通して授業評価を行う。

①は，学習前・後に学習内容の基礎・基本に関わる内容を全く同じ調査問題を用いて調べ，それを比較し学習による変容を自己評価していくことをねらいとしている。また，学習内容を随時記録し，自分の学習履歴も含めて自己評価させることも行う。

②は，１枚の評価用紙の中で回答させ，学習履歴を記録させるので，自己評価のさいに今までの記述内容を一覧のもとに確認しながら自己評価させるということである。

③は，従来の自己評価は，情意面に関わって自己評価させることが多かったが，学習前後に取り組んだ調査問題での変容と学習内容を記録したものを確認しながら自己評価するので，認知面での自己の変容についての振り返りが多くなることをねらっている。

④は，生徒は，日々の学習によって自分が変容した意識をほとんどもっていない。たとえ１時間の授業の中でも必ずその生徒なりの変容がある。その自己の変容を繰り返し確認させることで，学習の意味を感じ取らせることをねらっている。

⑤は，生徒が記入した内容を教師が確認することで，授業が適切であったのかどうかの授業評価になるということである。同時に形成的評価としての活用法もあり，指導と評価の一体化という面でも有効であろう。以上の５つの視点に基づいて，本校の自己評価の実践を行ってきた。

具体的な方法としては，次の図１のような記入用紙を使用する[2)]。この記入用紙は大きく分けて以下の３つの部分から構成されている。

A［学習前後に行う簡単な問題で，学習を通しての進歩の様子を確認する欄］
B［学習の進行にあわせて，学習内容のまとまりごとに２～３時間に一度，学習内容の要点や感想などを記入する欄］
C［A・B の欄で自分の進歩の様子や学習履歴を確認しながら，自己評価を記入する欄］

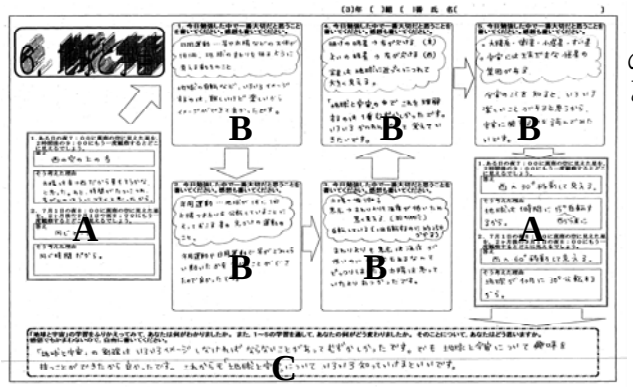

図１　自己評価の様式例

A の欄については，学習する単元や章の内容から簡単な質問を作成し，学習前と学習終了後に全く同じ問題に取り組み学習者に自己の進歩を感じ取らせることをねらっている。注意点としては，学習前であっても既習の学習内容から理解や判断ができるもの，または，日常の生活経験から学習者が何らかの回答を行えるものであることが望ましい。B の欄は，学習の進行にあわせて，学習内容のまとまりごとに学習内容の要点や感想などを記入する欄である。学習履歴を自分の言葉で記録させることで，学習内容の確認や構造化に役立つとともに，指導者が意図した内容が適切に習得されているのかを確認する手段となる。適切な学習が行われているか学習の進行に合わせて確認できるので，形成的評価としての側面も有する。さらに，学習者の記入した内容に教科担任がごく簡単なコメントをかえし，自己評価の着眼点を指摘することで，自己評価のレベルアップを図りメタ認知能力の向上を図るとともに学習者と指導者の心情的な交流もねらいたい。

C の欄は，学習がすべて終了した時点で記入する欄で，A・B の欄の記入内容を確認することで自己の進歩の度合いや学習履歴を振り返りながら,自己評価を記入する欄である。A・B の欄の記入内容を確認しながら自己評価させることで，情意面での振り返りを行うだけでなく，認知面での自己の進歩に着目させることができる。認知面での進歩を実感させることが学習の効力感を感じさせることにつながり，やがては，学ぶことの意味や意義にもつながるのではないかと考える。

（３）　研究の成果と課題

本実践を通してのここまでの成果は，生徒が自己の学習による変容を意識しはじめたことであろう。各教科担任が実践しているので，データが膨大であり，詳細な検討

分析はまだ完了していない。今後様々な角度から調査しながら生徒の意識の変化について検討していきたい。

また，今後もこの実践を通して学びの意味を感じ取らせることで，学びへの意欲を引き出し，主体的に考え判断し，行動する生徒の育成につなげたいと考えている。

次に示した表２は，生徒が記入した自己評価の内容を次の①②③の観点で分類したものである。先述したように本実践のねらいは，認知面での変容をとらえさせ学習の意味を感じ取らせることにある。したがって，生徒が記入した自己評価の内容が認知面を中心に行われていることが重要である。そこで，生徒の自己評価がどの程度認知面から行われているかを３年理科の「運動と力」を例に分析したのが次のものである。実に，76.4 %の生徒が，認知面を中心に自己評価を行っている。

［分類の観点］

①自分自身の認知面の変容から自己評価を行っている

【分類例；生徒が実際に記入したもの】

○この「運動と力」の授業によって今まで「なぜこうなるんだろう」と思っていた原理が分かってよかった。

○最初は何で速くなるのか分からなかったけど，１～５までを学習して，なぜ，斜面を下るボールの速さは速くなるのか分かった。

○この勉強をする前にやった問題は，だんだん速くなるのはわかったけど，その理由までは，よくわからなかったけど，勉強して，理由がわかるようになってよかった。

②情意面から自己評価を行っている

【分類例；生徒が実際に記入したもの】

○記録タイマーの実験がすごく楽しかった。最初の予想と最後の結果があたっててよかった。

○運動と力はつまらなかった。しかし，とても重要なところだと思うので勉強してそんはないと思った。

○記録タイマーのところが楽しく授業できてよかった。

③判断不能

【分類例；生徒が実際に記入したもの】

○運動の速さと向きの関係や運動の種類，記録タイマーの使い方などをおぼえた。

○（単に学習内容を列記してあるもの）

○未記入

表２　自己評価内容の分類（ｎ＝１３５）

分　類　の　観　点	人数（人）	割合（%）
①自分自身の認知面の変容から自己評価を行っている	１０３	７６．４
②情意面から自己評価を行っている	１９	１４．１
③判断不能	１３	９．６

本年度の実践の課題としては，次のものがあげられる。

○評価は目標の裏返しであるので，自己評価を行う場合も学習者自身の学習目標を明確にさせておくことが必要である。それを明確に意識させる方法を検討する。

○指導に活かす評価という視点から，学習者が記入した内容をその都度，確認・分析し，形成的評価として活用することをさらに進める。

○学習前後に取り組ませる問題を工夫し,さらに学習の効力を感得させる方法を検討する。

○自己評価用紙に記入させる際に，配布・記入・回収を含め，できるだけ短時間でスムーズに行う方法を工夫する。

○学習者の自己評価能力と学習意欲を高めるための指導者のコメントのあり方を検討する。

（４）　研究成果の普及の方策

・平成１６年度に公開研究発表会を開催する。

・研究成果普及のため本校のＨＰに研究成果を随時掲載する。

注）

１）堀　哲夫　『学びの意味を育てる理科の教育評価』PP.54-58　東洋館出版社 2003

２）堀　哲夫　『新しい評価の考え方を生かした評価シート集』　東京書籍　2002

◇　次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。（複数チェック可）

【新規校・継続校】　■１５年度からの新規校　□１４年度からの継続校

【学校規模】　□３学級以下　□４～６学級
□７～９学級　□１０～１２学級
■１３～１５学級　□１６学級以上

【指導体制】　□ 少人数指導　□Ｔ．Ｔによる指導
■ その他

【研究教科】　■ 国語　■ 社会　■数学　■ 理科
■ 外国語　■ 音楽　■ 美術　■ 技術・家庭
■ 保健体育　□ その他

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】　■ 有　□無

【特色ある取組事例として紹介したいポイント（都道府県教育委員会記入）】

自己評価を中心とした取組

・１枚の自己評価用紙に，学習履歴を記録し，学習の進歩の様子を確認しながら自己評価を行うことにより，生徒自身には学びの意味を理解させ，教師にとっては授業改善につなげることができる。各学校の生徒の実態に応じた評価用紙や利用場面などを工夫することによって，多くの学校で，学力の向上に役立てることができる。